

令和元年6月17日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16700

研究課題名（和文）近代東アジア仏教交渉と元曉（617-686）表象化

研究課題名（英文）Representation of Wonhyo (617-686) in Modern East Asian Buddhist Society

研究代表者

孫 知慧 (SON, JIHYE)

関西大学・東西学術研究所・非常勤研究員

研究者番号：90736604

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近代東アジア仏教界の交渉を背景とした元曉（617-686）認識にかかわる研究資料を分析し、その特徴、示唆などについて検討した。その結果として、1）元曉の主要著作から二門構造の設定のような論理展開の方法を分析し、近代以来の元曉理解が生み出した元曉思想に対する理解との差異を明らかにした。2）東アジアのそれぞれの国の歴史と仏教界の状況によって変化された元曉観について紹介した。3）全体的な元曉研究史を検討する上で、現代に至る元曉をテーマとする文学、芸術、映画、メディア、文化事業などの事例を検討し、近代における元曉再解釈が今日の元曉の大衆化に至大な影響を与えていることを指摘することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

申請者は、近代、東アジア仏教界、文化交渉をキーワードとして元曉をめぐる再評価を総合的に把握することを目指したい。このことは、近代日中韓の仏教界の歴史的展開とその背景、および相互の影響関係を明らかにすることにつながるはずであり、ひいては今後の東アジア仏教のあり方を展望することにも資すると期待する。

研究成果の概要（英文）：This study examines the historical background and specific aspects of the re-recognition and representation of Wonhyo 元曉 (617-686) in the modern East Asia. As a result: 1) I analyzed the method of logic development and the ideological features such as the setting of "two gates" in his major works, and found that there is a difference in the interpretation of Wonhyo's thought since the modern era. 2) I reviewed and critiqued the Buddhists' views on Wonhyo that differ according to the historical situation of Buddhist circle of each country. 3) In reviewing the overall history of research on Wonhyo, I also investigated literature, art, film, drama, media, and cultural projects on the subject of Wonhyo, and the findings indicate that the modern era's reinterpretation of Wonhyo has a great impact on the popularization of him today.

研究分野：仏教学

キーワード：近代仏教 元曉 東アジア仏教 表象化

1. 研究開始当初の背景

韓国と日本を問わず、これまで韓国の僧侶の中で最も多く研究された人物が元暁である。福士慈稔『新羅元暁研究』(大東出版社、2004年)、金相鉉「高麗時代の元暁認識」(『精神文化研究』54巻、韓国学中央研究院、1994年)などのように、元暁研究史にふれる重要な成果も見られる。しかし、近代における元暁認識に注目した研究は見当たらず、単行本や新聞雑誌などに収録された近代日韓の元暁関連記録さえ紹介されていなかった。また、従来の研究は元暁の主要論疏と生涯研究に重点が置かれ、日韓の仏教交渉の中で元暁認識の変化を探った研究は見当たらない。このような問題意識を踏まえた上で、本研究者は、博士論文において近代日韓仏教の交渉と元暁論というテーマのもと、近代における元暁像がどのような経過を経て形成されたのかを歴史的事実に即して明らかにした。その主な結果として、元暁は「近代」を起点として「仏教の真里を体得した高僧」と言うより、「韓国民族思想と文化の自負心の象徴」として再登場したこと、また、民族英雄、改革家、僧軍、通仏教の象徴人物として表像化されたことを指摘することができた。しかし、残された課題は多く、日本国内での関連資料の調査と研究が引き続き必要なのであるということに気づいた。特に元暁思想に対する認識の変化をたどるためには、より広く資料を調査し、元暁再評価の道筋を解明するとともに、元暁本来の思想と近代思潮の中で生きていた解釈者との間の齟齬についても注意を払う必要がある。さらに、中国側の資料も入手し、東アジア三国間の仏教界の変化と元暁表象化の具体的様相も整理する必要がある。

2. 研究の目的

元暁(617 - 686)は、新羅に限らず東アジア仏教界の中で大きな存在感を持っていた人物であったが、崇儒抑仏の朝鮮時代を経る過程で、その存在はさほど重要視されなくなった。しかし近代になると、日本仏教界との交渉、西洋宗教との競争といった背景の中で、元暁は脚光を浴び始める。この問題を考察した本研究者の博士論文「近代日韓仏教交渉と元暁論」による研究成果に基づき、その具体的様相をさらに明らかにすることを目的とする。ひいては、これまで触れることのできなかつた近代中国の仏教界までを視野に入れて近代東アジア仏教界における元暁認識を考察していく。近代に再注目されるようになった元暁とかわる文献、言説の方面、たとえば「和諍論」「仏教統一論」「護国仏教論」「僧侶妻帯論」などにも注目し、元暁表象化がこれまでの仏教界の元暁認識に与えた影響、また虚構などを指摘し、その理由と歴史的意味について具体的な資料に基づいて明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 基礎資料の調査

平成28年度は、近代の元暁関連資料の調査と収集を重点的に行った。近代アジア仏教徒の元暁認識を解明するための基礎作業として、日本・中国・韓国の雑誌・論文・記事を調査し整理した。大学図書館、地域文化館、寺院を訪ねるとともに、資料収集ののち、国家別、

時期別、主題別、人物別に目録を作成した。

(2) 著述と思想に関する資料の分析

平成 29 年度は、近代東アジアにおける元暁の著述と思想に関する資料を中心に分析を行った。たとえば、近代における元暁の遺著がどのように把握されていたのかを検討し、これらの分析により、近代の元暁論疏研究が現在の元暁思想理解に及ぼした影響を検討した。さらに、その背景として近代の日中韓の仏教学の交渉関係と思潮の流れについても考察した。

(3) 文化・思想交渉の視点からの分析

近代期の日中韓の元暁をめぐる相互認識を文化・思想交渉の視点から総合的に考察することを目指した。前近代の東アジア仏教徒の仏教観と、近代以来の西洋宗教の輸入と東アジア国家間の情勢の変化に伴う仏教界の認識変化などを分析した。特に、中華意識からはなれない意識の下で、韓国仏教の独自性を強調しつつ日本仏教界に傾倒していく韓国仏教徒の様相に注目し、その脈絡の中で元暁がどのように取り上げられたかを検討した。

4. 研究成果

(1) 元暁の主要著作『二障義』『十門和諍論』『大乘起信論疏』などに見られる元暁の思想展開の論理と構造を分析し、その成果は論文としてまとめ学術誌に発表した。この分析において、仏教伝統の「無諍」ともいえる立場と区別される元暁の論理展開の特徴を探る試みとして、元暁の論疏にみる「門・二門」の設定に注目した。元暁は、相反する主張を両門に配属させて、各主張の成立背景を分析し、対論者間の相互疎通を導こうとしており、ただ「非諍」「沈黙」のみ強調される場合見逃されがちである「相手の見解に対する理解と尊重」に力点を置いたことを明らかにした。しかし、このような元暁の和諍の試みは、近代以来に時間の経過によって、漠然な統合主義、一元化として理解する傾向がつよくなったおり、会通仏教や民族統一などの概念と結び付けられ現在まで理解されていることについて指摘した。

(2) 文献資料だけではなく、近代以来に元暁を主題とした映像、公演芸術も調べ、元暁大衆化にかかわる新たな情報を多く獲得した。1940年代に映画と演劇「元暁大師」の製作が推進されたこと、李光洙の小説『元暁大師』（1942年）を原作として作られた映画、ドラマ、演劇を確認した。また、これらの資料を分析し、植民地期、軍事政権期、民主化運動期をへる中で、韓国社会の政治、宗教的状况を反映して、元暁がどのように表象化されたか、どのように大衆に流布、拡散されたか、その歴史的意味と問題点を分析、紹介した。さらに、現在に至るまでの韓国社会における元暁宣揚事業、文化コンテンツ化などの事例に注目し、元暁を記念する文化館、寺院、公園、遺跡地における現地調査を通じて、元暁像の大衆的拡散と流布の特徴を分析した。その結果の一部として、元暁をテーマとする文学や公演芸術、たとえば無碍舞公演及び仮面劇などは、1970年代以来の社会における民主化運動、民衆仏教運動などに結びつけられ、大衆に急速に拡散されたことを確認した。そ

の過程において、元暁をめぐる髑髏水説話、瑤石公主、無碍舞逸話などが、拡大解釈、曲解された事例も多数見つかった。その時に作り出された元暁をめぐるさまざまなストーリーが、現在までも大衆の元暁認識に少なくない影響を与えていることについて指摘した。

(3) 元暁関連資料を幅広く収集、整理し、国家別、主題別、時期別、人物別に目録を作成した。また、現代までの元暁研究史を検討し、それらの研究の背景になった主要な事件やきっかけについて紹介した。その過程で、元暁の生涯と行跡を記録した「誓幢和尚碑」の発見(1914年)は、朝鮮総督府の古跡調査事業を背景にしていること、近代日本学界における『起信論』に対する関心、中国の金陵刻經處での經疏の刊行によって、元暁の起信論疏が再注目の機会を得たこと、元暁が「通仏教」の象徴人物とされたのは、近代日本仏教界で流行していた仏教統一論とも関係があることなどを把握することができた。また中国からの元暁にふれる資料は比較的になかったが、『仏教』『朝鮮仏教月報』『朝鮮仏教叢報』『金剛杵』などで見られる、中国仏教改革論、居士仏教に対する積極的な紹介に着目し、その動きが、元暁の持つ特徴と韓国仏教改革を結びつけ革新運動を展開するに影響を与えた可能性についても論じた。

(4) 全般的な近代仏教界の主要な変化、思想家・仏教徒の活躍、学問的交流と変化も推移などの背景を総合的に理解するきっかけになった。韓国仏教界と深くかかわった人物と彼らの影響を検討しており、国を渡りながら仏教界の動向を把握し元暁に対する資料を収集した人物など、たとえば、小野玄妙、望月信亨、横超慧日、今津洪嶽、中村健太郎、鄭晁震、崔南善、趙明基、許永鎬、楊文会の活動と業績について幅広く調査、紹介した。このように、本研究を通して、元暁という人物のイメージが固定されたものではなく、時代の状況に応じて様々な形で再創出されたことを認識することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

孫知慧、元暁の思想展開における「門・二門」の意味、東西学術研究所紀要、査読有、第50巻、2017、pp.307~322。

〔学会発表〕(計 1件)

孫知慧、「日帝 宗教 領有：元暁研究 明暗」(研究発表) 2018年度 韓国近代思想研究団・嶺南退溪学研究院 特別セミナー 近代 韓国 日本的学知 形成 風景、2018年2月21日、嶺南大学。

〔図書〕(計 1件)

「中村健太郎」、『開花期・日帝強占期 再朝日本人情報事典(一八七六 一九四五)』(共著) 高麗大学グローバル日本研究院 在朝日本人情報事典 編纂委員会、ポゴ社、2018年(担当部分：「中村健太郎」、pp.113-114)

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

